

---

# 彼女の沈黙

大氣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女の沈黙

### 【Zコード】

Z8940A

### 【作者名】

大氣

### 【あらすじ】

平凡な僕と、平凡な彼女の、少し不思議な日常です。もし宜しければ、お付き合い下さい。

僕の彼女は喋らない。元々喋れないのか、ある時急に喋れなくなつたのか、もしかしたら僕のいないところでは普通の女の子のように笑い声をあげているのかもしない。そんなことはどうでもいい。彼女は喋らない。まるでどこかに声を置き忘れてしまつたみたいに。

僕は家に戻ると、真つ先に彼女の部屋のドアを開ける。彼女は、いつも大きなベッドの真ん中に座り、僕の顔を見るとほんの少しだけ微笑み、再び何か儀式めいた視線でどこか遠くを見つめる。

彼女は喋らない。

僕は彼女の後ろにそつと座り、柔らかにウェーブした髪をそつと撫でる。彼女は少しくすぐつたそうな顔をすると、そのまま僕の肩に小さな頭を預ける。雨音だけが響くこの部屋の中、僕たちはまるで海の底にいるようだ。

ひとしきり撫でてもらつて満足そうな彼女は、ふわりと立ち上がりバスルームへと向かう。僕はまるで出来のいい従者のよう、彼女の後ろをついていく。お供しますよ。お姫様。

そこにある、無骨なハンドティングナイフ。まるで似つかわしくない彼女の小さな手は、いつも器用にそれをそつと真っ白な手首に這わせる。

彼女の左腕の柔らかな傷跡から真っ赤な血がとろりと滴り落ちる。僕は彼女の元に跪くと、まだ温かな彼女の血液を優しく舐める。

僕はいつも彼女の傷だらけの腕を舐めながら、少しだけ泣いてしまう。彼女は、そつと僕を右腕で撫で、寂しそうな笑顔を見せてくれる。

どうしてこんな風になつてしまつたのか、今となつてはもう分からぬ。僕も、そしきつと彼女も、ほんの少しだけ、何がが足りない。

なかつただけなのださう。

足りないものを埋めるように、不器用な手で作ったお城は、あまりに歪で誰の目にも留まらないけれど、それでも僕らはずつとここにいる。

僕と、彼女と、この小さなお城の中。

彼女は、何も喋ってはくれないけれど。

僕は、何も言つてあげられないけれど。

それでも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8940a/>

---

彼女の沈黙

2010年10月17日03時11分発行